

「先人の足跡」は、読者の皆様方がこれをお子さんやお孫さんに読み聞かせることにより、お子さんやお孫さんがおのずと道徳の大切さを感じ得ることができるように、事例を物語風にしていきます。

今回は1938年(昭和13年)酷暑のソ連領オトポールで起きたユダヤ人の救出を巡り当時の陸軍少将樋口季一郎(以下樋口という)がヒューマニズムの観点から決断を下した場面を中心に紹介します。

## 1 はじめに

作家相良俊輔は、樋口の晩年に親交を得て、その人間性に感動し、彼の人生を著作『流水の海』に描いています。その著作の中で彼を評して、「樋口は異才であった。陸軍部内でもユダヤ問題の権威であり、有数のロシア通であった。そしてこの人ほど物議をかもした人も少なく同時にまた、多くの難問の中に身をさらして苦慮懊悩し、そのつど勇氣と決断をもって、ただ一つのヒューマニテイの灯を消さなかった人も珍しい」と述べており、樋口の人

生を的確に表したものと云えます。

しかし、突然その境地に到達したわけではなく、少壮士官からの海外勤務を初めとした様々な巡り合いと広い視野に加え、謙虚であるが、合理的で何事にも向上心の強い人柄が大いに影響したといえます。

## 2 樋口とユダヤ人との関わり

樋口は、陸軍大学校でドイツ語を学び、1918年(大正7年)11月陸軍大学校を卒業後、陸軍大尉に昇任し参謀本部付となりました。当時日本陸軍の国防の対象はロシア軍であったため、ロシア語を学ぶ必要性から東京外国語のロシア語科に通いました。やがてロシア班に配され対ロシアの仕事を担当することとなり、それが縁で次に述べるユダヤ人と触れ合うきっかけを得ました。

(1) 1919年(大正8年)12月、樋口は、ウラジオストクの特務機関に発令されました。これがユダヤ人を知る最初の機会となりました。

特務機関は、情報収集、広報・宣伝等を任務とする機関でした。その公館は、3階建の建物の2階にあって、樋口は、その3階の一室に住み、隣にはロシア系ユダヤ人の一家が住んでいました。やがて樋口は、公務を終えたと3階の自室に戻り、食事と勉強を終え

てから隣のユダヤ人宅に行くのが日課となり、その家の家族や彼らと付き合っているユダヤ人の青年グループとの交流を重ね、一緒の語らいを楽しみました。一家の厄介になるなかで、夫人から生のロシア語を学び、又ユダヤ研究の基礎を修得しました。

この頃の樋口の回顧録に「ロシア人は本質的にユダヤ人を好まぬ。……ところが日本の多くの人々は、すべての外国人を英米人とみる気風さえあり、ユダヤ人を特別視しないような文化的環境において生活したからである。これが一家が私に好感を抱いた理由とみている」と記しています。

(2) 1925年(大正14年)、樋口はポーランド駐在武官としてワルシャワへ赴任しました。ここで親しく付き合ったロシアの駐在武官の紹介により、コーカサス地方の視察旅行を行い、ソビエトを知る機会を得るとともに、グルジアの首都チフリス郊外で出会ったユダヤ人の老人の話に強い感銘を受けたのです。

老人は、「私たちユダヤ人は、世界で一番不幸な民族である。どこへ行っても冷たい仕打ちを受けた。……ただ、一生懸命神に祈れば、必ず地上のメシアが助けてくれる。旧約聖書は、私たちにそう教えている。日本は東方の国で、太陽の昇る国であり、その日いつ

る国の天皇がメシアなのだと思う。あなたたち日本人は、われわれユダヤ人をいつかどこかで、きつと助けてくれるに違いない」と、涙を流しながら語ったが、これらの言葉は樋口の脳裏に刻まれていきました。

## 3 樋口の向上心

(1) 樋口は、1888年(明治21年)、淡路島の南端三原郡阿万村、現在南阿万市阿万上町や阿万西町と呼ばれる地の輿濱家の長男として生まれしました。輿濱家は、江戸時代から代々回船問屋を営んでいました。三原高等小学校を首席で卒業。次いで兵庫県にあった旧藩校で進学校の鳳鳴義塾に入学、大阪陸軍地方幼年学校に入学します。

18歳の時、子どものいなかった叔父を名乗るようになりました。これまでに、樋口の幼少時の輿濱家の家業は衰退し、両親が離婚、子供たち5人は母親に連れられ、実家にいました。軍人志望者が多い名門校の鳳鳴義塾を勧めたのが、良き相談相手であった叔父でした。どこの学校においても向学心を持ち、また苦難に遭遇したときには他人を救うとの気概は、樋口の幼少時の苦難の体験から出てきたものと思われまます。

(2) もともと多才な樋口は、音楽を始

め芸術への関心は人並み以上に強く、ポーランド駐在武官当時ヨーロッパは、芸術運動が盛んな時期でもあり、オペラ鑑賞に熱心に通っていました。

また武官の仕事の大半は、各国外交官、武官、地元有力者との交際でした。実際には語学が必要不可欠であったため、貴族出身の老婦人から毎日2時間フランス語を勉強しました。この語学以上に必要なのが社交ダンスでした。樋口は一念発起し、ワルシヤワオペラ

専属バレエ教師について本格的に練習し、2カ月間猛特訓の末、その腕前は太鼓判を押されるまでに上達しました。この年のクリスマスには在ワルシヤワ英国大使館で開催された仮装舞踏会では、サムライの格好で会場をおおいに沸かせたようです。

こうした前向きな取組みと駐在武官として社交界への出入りを通じ、情報収集や人脈の構築、さらにロシアを含むヨーロッパ社会、キリスト教文化を多方面から理解したものと思います。

#### 4 ユダヤ難民に対する各国の態度

世界にはユダヤ人を嫌う国もありましたが、1933年(昭和8年)にドイツにナチス政権が誕生して以降、ユダヤ人への迫害が強まりました。ユダヤ人ホイコット運動が全国的に起

り、ユダヤ人の海外避難が発生するようになりました。

米国のハル国務長官は、1938年(昭和13年)3月、29カ国に対し、ドイツ、オーストリアからの避難民に便宜を図るための国際委員会を設置した

いとメッセージを送りました。米国議会にも同趣旨の決議案を提出しましたが不成立に終わりました。ハル長官メッセージに対する各国の反応を調査した日本外務省の報告では、英国は事実上拒否、ベルギー、オランダ、南米諸国は受け入れる余地なし、オーストリア、ニュージーランドは取り扱いが嚴重ということで、世界で制限してないのは日本だけでした。

この調査を見ても当時のユダヤ人避難民に対する各国の敵しい態度と差別をしない日本との差が歴然としています。

#### 5 オトポール事件と決断

前述したユダヤ人難民に対する敵しい状況のもとにオトポールで事件が起きました。

オトポールは、ソ連(現在のロシア)領内の町で中国の満洲里から20km離れた、人口5百人足らずの荒涼とした国境の町です。1938年(昭和13年)3月10日、当時ハルビン特務機関長であった陸軍

少将の樋口のもとへ報告が届けられました。それは、ナチスに迫られたユダヤ難民が、満洲国に助けを求めためシベリア鉄道の貨車でオトポールに

来たが、満洲国が拒否したため、吹雪の中で零下数十度の北満の原野に立ち往生している。食料は尽き凍死者が続出し、危険な状態にさらされている、という内容でした。

本来独立国家である満洲国政府が入国の手続きをすべきところを拒否したのは、当時の世界情勢が影響したといえます。日本は1936年(昭和11年)にドイツと防共協定を結んでいることから、ユダヤ人難民については、ドイツ、日本政府や関東軍に気兼ねし、入国を拒否したと言えます。

樋口は、オトポール事件発生後詳細に情報を集めていましたが、その時カウフマン博士が来訪しました。博士は、ハルビン・ユダヤ人協会の会長で、ハルビン市内で総合病院を経営する内科医で、日本人の間でも評判の医者でした。また大の親日家でもあり、反ナチスの闘士でもありました。

カウフマン博士と樋口の関係は、事件の3カ月前の12月にさかのぼります。ある吹雪の夜、樋口は突然カウフマン博士の訪問を受けました。樋口にナチス・ドイツのユダヤ人の迫害状況を説明し、こうしたナチ・ドイツの非道

を世界に訴えたいと述べ、極東ユダヤ人大会を開催したいので「大会開催の許可をいただけませんか」との要望に対し、快諾したことに始まります。

第1回極東ユダヤ人大会は、12月26日ハルビンの商工クラブで行われました。樋口は、この大会に個人の資格で出席し、祝辞としてユダヤ民族に対する高い評価、理解と同情、反省と提言を行ったところ、出席者から割れんばかりの拍手を受けました。

さらに大会の1ヵ月後、カウフマン会長から謝恩会に招待され、世界各地からの報道陣の見守る中、ユダヤ民族の優秀さをたたえ、人道主義の日本はドイツと一線を引き、ユダヤの祖国の復興を願う気持ちを表した演説をしました。演説が終わると会場から万雷の拍手と歓声が起きました。それはユダヤ人がキリスト教徒に虐げられた長い歴史の中で、異教徒から受けた最大に情愛ある演説を受けたからです。

こうした経緯の後にオトポールの出来事を聞き、樋口にユダヤ難民の救助を求めに来たのです。

樋口は、しばし熟慮のうえ「カウフマン博士、難民の件は承知した、誰が何と言おうと、私が引き受けました。博士は難民の受け入れ準備にかかってほしい」と回答しました。

この時の樋口の覚悟の決断はゆるぎないものでした。妻・静子には「俺、クビになるから帰国の荷造りをせよ」と命じたように、クビを覚悟の決断であったのです。

この決断によりオトポールの難民は、2日後の3月12日に手配された救援列車でハルビン駅に到着し、凍死者、凍傷患者を除き商工クラブや学校に収容されました。

その後、このルートによる難民は、数千人とも2万人とも言われるが定かではありません。ただ、救出後はハルビンに残留する者、上海に行き同地に留まる者や、上海経由で米国に向かった者がいると言われています。

### 6 オトポール事件後の影響

オトポール事件から2週間後、独外相から駐日オットー大使を通じ強硬な抗議がありました。外務省は驚いて陸軍省に回送し、陸軍省は関東軍司令官へ事件の真相の報告を求めてきました。そしてその日のうちに樋口に関東軍からの出頭命令が出されました。

関東軍司令部に出頭した樋口は、参謀長室で東條参謀長と向かいあって座り、東條の質問より先に「ドイツの国策なるものが、オトポールにおいて、追放したユダヤ民族を進退両難におとしいれることにあつたとすれば、それ

は恐るべき人道の敵というべき」と説明しました。東條は、「樋口君、よくわかつた。あなたの話をもっともである。ちゃんと筋が通っている」と述べ、この件は不問になり、樋口の決断と処置が事実上認められました。

### 7 その後の樋口

(1) ハルビン特務機関長の勤務も1年で終え、参謀本部第2部長に赴任する。出発当日は、ハルビン駅は2千人近い人の見送りで埋め尽くされ、「ゼネラル・ヒグチ」を連呼し、涙を流す人が多かつたと言われています。僅か1年の勤務の人に対し、このような歓送をすることがあるでしょうか。

(2) 1941年(昭和16年)11月、世界ユダヤ人会議の代表のM・ウスイシキン博士署名によるゴールデン・ブックへの登録が樋口等に対し行われました。現在は感謝の意を表する形で取り扱われ、エルサレムにあるJNF(ユダヤ民族基金)に保管されていますが、国際的にも極めて貴重と言えます。

(3) 1945年(昭和20年)8月、極東ソ連軍は、アメリカ軍の占領下にある樋口を戦犯に指名し、連合軍総司令部に引き渡しを要求してきました。その背景には対ソ連の情報活動の要であるハルビン特務機関長を務めたこと。また、8月15日の終戦の詔勅によ

り日本軍は戦闘を停止し、米軍も戦闘停止しましたが、ソ連軍最高統帥部は、南樺太、千島列島、北海道への侵攻作戦を発令する暴挙に出ました。8月18日、千島列島の最北端に位置し日本軍が守備する占守島にソ連軍が攻撃してきましたが、第5方面軍司令官樋口が断固として反撃を命じ、手痛い打撃を与えたこととなりました。

このソ連の要求をマッカーサー総司令部は、拒否し、ゼネラル・ヒグチは人道主義者であると擁護の通告をしました。この回答の背後には、アメリカ国防総省があり、その国防総省を動かしたのが、米国ユダヤ会議でした。この会議の幹部の中にオトポールで救出された人がおり、ここから「樋口救出運動」が燎原の火の如く世界的に広がり、国防総省を動かしたからでした。

### 8 おわりに

樋口のオトポール事件に対する決断は、今日では人道主義の立場から当然のように見えますが、当時は日本と防共協定を締結し盟友と考えていたドイツからの抗議、ドイツとの関係を重視する陸軍省、各国のユダヤ人難民への厳しい対応のなか一特務機関長として職を賭けた厳しい決断であつたと思われまふ。しかし、彼が長年培ってきた国際的視野と、ユダヤ人の状況を踏ま

えたヒューマニズムにより、自分がどうなつても救おうという信念と覚悟をもって貫き通しました。

では当の本人はこのことをどう受け止めていたのでしょうか？ それは不明です。なぜなら本人はオトポール事件の詳細について語ることはなかつたからです。それは、樋口家の家族にも同様で、家族が事件を知つたのは、樋口が没した後の新聞記事だつたとされます。



出典：ウィキペディア

### 【参考文献】

- ・木内是壽「ユダヤ難民を救つた男 樋口季一郎・伝」
- ・相良俊輔『流水の海』
- ・早坂隆『指揮官の決断―満州とアツツの将軍 樋口季一郎』
- ・樋口季一郎『アツツ、キスカ・軍司令官の回想録』
- ・上原卓『北海道を守つた占守島の戦い』